

世代間伝達に関する精神分析的考察（Ⅱ）

辻河 昌登

問題と目的

親は日々我が子を育てながら、また時に自分の老親から子育ての思い出話を聞かされることなどから、自らの人生についての遡及的な回顧の作業を進め、我が子との親子関係を構築しながら、同時並行的に自分の外的ないしは内的な親（老親）との間でも親子関係を再構築している。そしてそのプロセスの中で、自分の親とのかかわりの経験が、自分が親として子育てをする上での基本的な枠組みとなっていることに気づくことがある。心理臨床場面では、子育ての困難を訴える母親と出会うことが多いが、彼女たちは子育ての技術的なレベルの問題よりも、むしろ自分の親との未解決の問題に絡め取られており、それが我が子とのかかわりにおいて困難を来しているといったことが往々にしてある。そしてその問題が世代間伝達されることによって、子どもがその問題を背負わされ、症状や行動として表現していることに気づかされる。

筆者は日々心理臨床活動を行いながら、そして我が子の子育てをしながら、こうした上の世代（老親）と自分と下の世代（子ども）といった三世代の相互的な関係の中で起こっている事象に問題意識を持ち始めた。拙稿（辻河,2008）では、精神分析的な観点からみた世代間伝達に関する代表的な先行研究（古澤,1954; パルマリ,1979; クリュル,1979; エリクソン,1980; フライバーグ,1980; 小此木,1992,1988,2002; レボヴィシ,1988; クラメル,1989; 田中,1997; 鶴飼,2000; 橋本,2000; 渡辺,2000; 深津,2002）を展望し、一臨床事例の考察を試みた。本稿はその続編である。今回も一臨床事例を取り上げ、世代間伝達における心的メカニズムについて明確化することを目的とした。なお本論では、世代間伝達（intergenerational transmission）という言葉を用いて、「親が自分の親との間で形づくった対象関係に基づいて子どもと関わる中で、その対象関係のパターンが子どもに伝達されること」と定義して用いることとする。

精神分析学と世代間伝達

世代間伝達という概念を最初に明らかにしたのは、精神分析学の創始者のフロイト,S.(1933)である（小此木,2002）。フロイト,S.は、親は自分自身が自分の親から受けた厳しいしつけを、今度は自分が親に同一化して子どもに対して繰り返すと語り、「子どもの超自我は、もともと両親を規範として築き上げられるのではなく、むしろ両親の超自我を規範として築き上げられる。超自我は伝統の担い手になる。つまりこのようにして世代から世代へと受け継がれてきた一切の不変的な価値の担い手になる」としている。さらに、「人類は決して現在にばかり生きてはいない。

超自我のイデオロギーの中には過去が、種族および民族の伝統が生き続けている。この伝統は現代の影響や新しい変化にはただ緩慢にしか譲歩しないのであり、伝統が超自我を通じて働き続けていくかぎり、それは人間生活において経済関係に左右されない強力な役割を演じる」としている。

先述したとおり、その後の精神分析的観点からの世代間伝達に関する代表的な先行研究は、拙稿（辻河,2008）で展望した。今回はまず、今まで精神分析学よりも発達心理学の領域で取り上げられることの多かったエリクソン,E.H.とボウルビィ,J.の知見について、世代間伝達研究への貢献を紹介することにする。

(1) ライフサイクル論と世代間伝達

エリクソン,E.H.(1950)は人間の発達を育てる者と育てられる者との相互的な世代関係によってとらえており、中年期の心理社会的課題について、次の世代を支えていく子どもたちを生き育てることに積極的に関与することであると、それを「世代性(generativity)」と呼んだ。エリクソン,E.H.は『幼児期と社会』(1950)の献辞に、「私たちの子どもたちの子どもたちへ(TO OUR children's children)」といったメッセージを記しているが、このことは彼がライフサイクル論の中で「世代性」を強く意識していたことをうかがわせるものである。西平(1993)によると、エリクソン,E.H.は「父-子-孫」という3世代におけるそれぞれの親が、子どもに対して既成の価値の継承を期待するのではなく、むしろ子どもが前世代とは異なる新しい仕方次第で次の世代を築いてゆく可能性を見届けようとしているという。つまり、親が自分の子どもが「子どもであること」を「可能性」としてとらえ、子どもの未熟さにこそ予想を遙かに超えて発達する可能性を見、新しい社会を作ってゆく可能性、新しい親になってゆく可能性を見ようとしているというのである。

さらにエリクソン,E.H.は、親が子どもを育てるという一方向的なものではなく、同時に子どもに育てられるといった「相互性(mutuality)」についても言及した。鱧(1990)はエリクソン,E.H.のライフサイクル論の視座から、「心理臨床的な問題は三世代を要する」とし、親は子どもとしての親との関係、親としての子どもとの関係という三世代間の心理的な再編成の仕事しなければならないとしている。そして、その再編成の課題は、子どもたちの反抗、拒絶の試みに耐え、信頼を持って見守り、子どもたちの新しい異質の考え、親としての自分を超えた理想像や権威像を受け入れ、心理的に自分との距離を取っていく不安や恐怖に耐えていくことであると、親世代がこうした課題を引き受けることができないとき、それらの課題はすべて子どもたちが背負わされることになるとしている。さらに鱧は、それぞれの世代が同時的に変化し、かかわっていくことを「多世代的発達作用」と呼び、世代的な伝達は持続して行われていくが、家族の各成員は伝達内容をそれぞれの発達段階において内在化していくとしている。たとえば、父親における自分自身の父親との関係の基本的対人関係のパターンが自分の息子との相互関係に伝達されるが、その際どんなパターンが伝達されるかは、息子の発達と父親のライフサイクルの段階との相互作用で決まるのである。

(2) 愛着理論と世代間伝達

ボウルビィ,J.(1969, 1973, 1980)は愛着理論から、家族の相互関係には4つのパターンがあり、そのうちの1つとして「母親またはごくまれに父親が、愛着対象に関して慢性不安に悩んでおり、

子どもを仲間として家にとどめておく」パターンについて論じている。そのパターンの親は、親自身が子どもとして与えられなかった、あるいは失っていた愛情のこもった世話をしてほしいという望みを遅ればせながら満たそうとする、つまり無意識のうちに子どもに親の姿を求めて、自分自身は子どもの役割をとるといった形で親子の役割を逆転させ、子どもに親を愛するように期待し、愛され慰めてもらいたいと求めるのである。さらにボウルビィ,J.は、不登校児が母親から受ける敵意に満ちた取り扱いのプロセスが3つ存在し、その3つの過程のうち、1つ以上が働いているとしている。その3つとは、以下のようなものである。

- (a)初めは自分の母親によって引き起こされた怒りを子どもに向ける（置き換える）。
- (b)自分の母親が持っていた拒否および（または）要求の特徴を子どもが持っているように考えて、子どもに怒りを覚える。
- (c)自分の母親が見せていた怒りの行動に倣って、子どもにその行動を示す。

これらは後述する、投影同一化、攻撃者との同一化といった概念と近似しており、愛着理論が精神分析学に多大なる示唆を与えていることが見て取れる。

臨床素材の提示

さてここで、筆者の臨床事例を取り上げ、世代間伝達の心的メカニズムについて検討する。なお、提示する事例はプライバシー保護のために、テーマの本質に深く関わらない部分は変更していることをお断りしておきたい。

(1)心理療法過程

クライアントは、初回来談時60代後半の専業主婦Aさんである。Aさんは「10数年前から身体の症状が取れない」ということを主訴として病院を受診した。家族は、夫、Aさん、息子、嫁、孫4人の8人家族であった。夫は70代前半で、元公務員であった。息子と嫁はそれぞれ40代前半で、ともに公務員であった。孫娘（長女）と孫息子の長男はそれぞれ中学生、次男と三男はそれぞれ小学生であった。

Aさんの両親は、幼い頃から日本社会で差別されるという、運命としか言いようのない逆境に耐えながら勉強して能力を身につけ、差別する者を見返しながら生きていた。そして「教育ほど恐くて、教育ほど大切なものはない」と感じていた両親は、周囲の人たちは子どもを小学校に行かせるのが精一杯という戦前戦後の状況で、Aさんには小学校卒業後も女学校に通わせ、学校以外にもあらゆる習い事に通わせていた。技術職の父親は1年のほとんどを海外で単身赴任生活をしており、母親は自営業の社長をしていた。母親は仕事で忙しくしていたため、Aさんは母親にゆっくりと話を聞いてもらえず、逆に食事の時にも食事の作法や人とかかわり方を母親から厳しくつけられることが多かったという。特に、「人には何かのことで腹が立っても絶対に嫌な顔をしては駄目」と繰り返し言われたという。

こうして幼い頃から家族でゆっくりと過ごす時間を体験できなかったAさんは、女学校を卒業した数年後に何度か見合いをし、結婚相手として家族の時間をしっかりもてそうな公務員の相手を選んだ。しかし、家族とはともに過ごせるものの、経験したことのない農作業をやらされ、家事で忙しくしながらも夫と姑の依存欲求を受け止め、また彼らの欲求不満の捌け口となる役割を

担う生活となり、「地獄のような日々」を送ることになってしまった。結婚2年後には子宝に恵まれたが、その数年後には胃潰瘍で吐血したため、息子を連れて実家で数ヶ月間静養することとなった。その時には離婚を考えていたが、しかしある日、愛息の「早くお父さんに会いたい」という一言で、「この息子のために生きる。人生をこの子に賭ける」と考えて思いとどまり、夫や姑のもとに戻った。その後、再び「地獄のような日々」を送ることになったが、そうした日々の中で、Aさんには「すべて自分が正しいと思うから相手に腹が立つ。相手があなたを批判するのは、そう言わせるあなたに何か悪いところがあるからなのだ」という、幼少期から父親に言われていた言葉が思い出され、自責的に耐え続けていた。

その後、Aさんは娘を出産。「二人の子どもを育てることが、私の唯一の生き甲斐だった。二人ともよく私の言うことを理解できる子だった。両親から教育された考え方やしつけを二人の子どもたちにしっかりと教育して伝えるのが、私の使命と考えていた」という。そのため、夫と姑からの「嫁いびり」に耐えながら、子どもたちに自分の苦勞した生き様を語り、「世間に出しても恥ずかしくないように教育する」という日々を送った。そして、やがて二人の子どもたちを大学に行かせ、地元の公務員職に就かせることができ、「私の思い描いた通りに二人は成長してくれた」という。さらに、Aさんの教育は息子と娘にとどまらず、孫にも及んだ。しかし孫への教育は、息子の第一子である長女が幼稚園の時、断続的な不登園となったのをきっかけに嫁からの反発を招いた。それまでAさんに比較的従順だった息子も、「我々はある人の操り人形じゃない。僕もB子（妹）も操られてしんどかったんや！この子たちには同じことをしないでほしい！」といった言葉を皮切りに、中学時代に部活や塾で陰湿ないじめを受けていたこと、いじめられていることをAさんに相談しても「あなたに悪いところがあるから」と言われるので相談できなくなったことなど、昔から抱いていたAさんへの不満を猛然と訴え始めた。その頃からAさんは腎盂腎炎、膀胱炎、心筋梗塞、胃炎などの様々な身体症状を呈するようになり、やがて病院の精神科を受診し、主治医の勧めで非常勤勤務していた筆者（以下「私」と表記）との心理療法を行うことになった。心理療法は原則として週1回、50分、対面法によって、2年4ヶ月間行われた。

Aさんは毎回清楚なきちんとした身だしなみで来談し、椅子に座る前にピンと背筋を伸ばし、深々と頭を下げて挨拶をするのが常であった。初回のセッションでは、話し始めると表情が暗く、だるそうに話す様子からは、「やつれた老婦」といった印象を受けたが、生育歴の話になるとつらさをこらえながら気丈に話すのが大変印象的であった。来談初期は上述した生育歴を理路整然と語り、特に差別された経験と夫や姑に反発しないで生活していたことを力説していた。そしてセッションを重ねるごとに、次第に「先生にお会いするようになってから元気が出てきました」「先生と一週間にもっとお会いできたらと思うんですけど」「もう先生には何でもお話しします」「私は普段人の話を聞くばかりで自分では本当に喋らないが、ここではあきれるぐらいにしゃべっている。今は先生と話したくてたまらない」などと陽性の感情を語るようになった。また茶道、華道などの習い事から得た知識や家事での工夫を毎回のようによく力説したり、趣味で作成した絵画の作品を持参して満面の笑みで説明したりするようになり、さらに真っ赤な口紅をつけて来るようになるなど、初回の「やつれた老婦」といった印象はまったく感じられないほど、生き生きとした表情で語るようになった。この頃から私は、豊富な知識、多彩な特技や趣味を持つAさんに対して、人生の先輩として敬意を抱くようになった。また毎回のようによく力説する家事での工夫の

話からは、まるで私は家事についての講義を受けているような気分にもなっていた。その中で、「うちの息子には洗濯物を干すとき、シャツはパンパンと叩いてしわを伸ばしてから干すように教えていた」という話をAさんから聞いた数日後、私は自分が自宅で洗濯物を干すときに、無意識のうちにシャツをパンパンと叩いているのにはっと気づいたことがあった。この時以来、私はAさんから大変影響を受けていることを自覚し、面接場面では「息子のようにつけられているのではないか」と感じるようになった。またその頃から、Aさんは「私は相手の方のプライベートのことを知っておかないと、本音で話ができない」と言い、私の年齢や勤務先などのプライベートのことをしつこく尋ねてくるようになった。そしてあるセッションで、「子ども達二人は、結婚するまでは私の『手の中』にいた。二人が日々何をしているかをすべて把握していた」と語るのを聞き、また上述した「息子のようにつけられているのではないか」といった感じを抱いていた私は、自分も面接関係の中で「手の中」に入れられて「すべてを把握」され、支配されて身動きが取れなくなるのではないかといった一抹の不安が心をよぎった。案の定、その後も私に居住地や家族構成などを尋ね、それらに私が明確に答えないと、次の面接をキャンセルすることがたびたびあった。

こうした私へのプライベートのことに関する質問が一段落した頃、Aさんは口うるさい夫、家事をしない嫁、嫁を注意しない息子、きちんと規則正しい生活をしない孫たちへの不満を繰り返して語り、「悠悠自適に過ごせると思っていた」老後に、家事で忙しくしている自分を息子夫婦が労ってくれないことへの怒りを、時には涙ぐみながら語るようになった。そしてそうした家族について、「亭主関白で何もしない主人にしたのも私、家事をしない嫁にしたのも私、そういう主人を見て育てて何もせず、嫁に何も言えない息子を育てたのも私。腹は立つが、すべて私が悪い」「生前の母に『周囲の方には嫌な顔をしては駄目。それが夫の出世やあなたの評価につながるのだから』と言われた。主人には心で怒りながらも、その言葉が浮かんでいる」など、怒りを表現しながらも、どこか怒りを抑えて自責的になっている部分があることがうかがわれた。私がそれらの不満にひたすら傾聴し続けていると、面接が半年を経過したあるセッションにおいて、Aさんは涙を流しながら、「先生、・・・私は昔から甘えたことがないんです」と誰にも甘えられなかったつらさを語った。そしてその後のセッションでは、「最近はお会いする日が待ち遠しく、すぐくここに来たいと思う」「私は大声を上げて泣いたことがない。泣ける相手がいれば、こんな身体にならなかつたと思う。これからも先生に出来るだけお会いしたい」と強い来談意欲を語るようになった。その一方で、「私が一方的に話すだけではなく、先生の心理学者としての立場からアドバイスをいただきたい」「世間話のようなこともしたい。先生からもいろいろと話をしてほしい」など、面接にはっきりと不満をもらすようになった。そしてその頃、Aさんは以前に婦人会から自分の人生を語ることを依頼された講演会で、自分が昔から差別される立場にいたが教育は人並み以上に受けてきたことを聴衆に向かって話し、話している間は『あなたたち、差別をするなら、してみなさい!』という思いだった」というエピソードを語った。また、「先日、主人が理不尽なことを言うので、主人の目の前でお皿を流しにぶつけて壊した。主人に対して、『あなたにはもうものを言わないわよ!』と思ったが、それは言わなかつた」と語った。これら二つのエピソードは、面接関係の中で私に対して感じていることのメタファーであるのだろうと感じたが、私はAさんの激しい語り口に圧倒されてしまい、そのことを取り扱うことは出来なかつた。

た。すると、その翌週からキャンセルが多くなり、その後1年間は17回のみ面接となった。

その1年の間には、「最近では主人に言いたいことを言っている」「先生とお会いしてもいっこうに症状が落ち着かない。お会いするのもどうなのかと思っている。正直言って何もヒントがなかった。一言もアドバイスがないことはずっと前から感じていた」と語るため、<ご主人に言いたいことを言っているように、今日は私にも言えましたね。しばらくお休みされたのは、休むことで今日のような不満を訴えておられるのだらうかと思っていました>と応じたが、それに対しては無言であった。そして、再度定期的に来談するようになった頃には、「作法や礼儀が嫁には身に付いていない。私は母から伝えられたものを息子と娘には伝えたが、息子は孫たちをちゃんとしつけない。やはり私が母親になったつもりで孫達にもちゃんと伝えたい。先代から受け継いだものはなくしてはいけない」と言いながらも、その一方で「私が放っておけないのが良くないのかもしれない。嫁にとっては私の考えが気に入らないのかもしれない」と語り、その翌週のセッションでは、孫のことを放っておけないで手を出すことを、「『ちゃんとやらせたい』という私自身の気持ちを納得させるためにしている」ことを語った。そしてその後のセッションでも、「家事をしない嫁を変えるのではなく、自分を変えるしかないと思う」と語るものの、「私が孫娘の年の頃は、母と一緒に毎日夕食の準備をしていた。でも、孫娘は一切しない。嫁は孫達にそういう一般的なことをちゃんと伝えていない」と嫁を批判した。私は今までの家族のメンバーの反応を聴いてきた印象から、<もしかしたら、お嫁さんやお孫さんの「一般的なこと」というのが、Aさんのものと違うのかもしれないね>と応じると、Aさんは「あ〜、やっぱり私の物差しで考えるからしんどくなるのでしょうかね〜。私は古いんでしょうねえ〜。新しい物差しに変えないといけないのでしょうかねえ〜」と語り、「嫁や息子が『あの頃の子はあんなもんやで。うちの子はよく手伝う方や』と言うことが今まで理解できなかった。頑張っている孫たちをもっとほめてあげないといけないうのかもしれないね」と語った。その後のセッションでは、息子が長男の孫息子に家の墓を守っていくことが大事であることを話しているのを見て、「本家の9代目なのに！と思っていたが、息子に家のことは任せられると思えば安心した」「我々の世代が先代から受け継いだものは、息子や孫に受け継いで欲しい。息子はそういうのが抜けていると思ったが、孫にもちゃんと受け継いでいると思った」と語った。私が<「先代から受け継いだものはなくしてはいけない」ということでしたね>と言うと、「なくしてはいけないものもあると思います」と語った。そして年明けには、「年末のおせち作りには一切手を出さなかった」こと、元旦に「家長である息子の方を向きながら、『孫たちの世話や家事の全てのことから引退する』と家族に伝えた」と強い決意を語った。

その翌週のセッションでは、私が年度末までの2ヶ月で病院の非常勤職を終えることを告げた。そして今後のことを話し合うと、「私も先生と一緒に終わりにしていただきたい」と言い、あと4回のセッションを残すのみとなった。しかしその後、2週連続キャンセルとなった。その翌週もキャンセルの電話があったが、その時「これからも先生にずっとお会いしたいと思っていたのに、4月からお会いできないということが、どうしても受け容れられなくて〜・・・」と悲しそうに、甘えたように、声を震わせながら語った。私からは<最後の2ヶ月でお会いできなくなることを話し合いたいと思っていました。あと1回ですが、ぜひいらしてください>と応じた。

そして、最終回のAさんと私とのやりとりは、次のようなものであった。

「先生がこの病院を退職なさるというのを聞きしてから、今後どうしようかと思った。これから気持ちをぶつけていけると思って間もなしだと思った。半年前ぐらいから気持ちを話せるようになったように思う。先生の退職をお聞きして体調も崩し、体重も減った。『どうして今更変わるの？今更どうして？』と思ったが、そんなことを思うのは先生に悪いと思って、お休みをして距離を置いた。でも先生とのお別れは自分で乗り越えないといけないとも思った。私のつらかった昔のことを本当によく聴いてただけて、わかってただけて、本音が言えるようになったのに、お別れというのはつらかった。何もかもが不安になってきて、食欲もなくなった。」<私の事情でお会いできなくなるということで、私にはAさんに悪いなという気持ちがあって、また私にもお別れするのがつらいという気持ちがありますから、最後の4回でお互いにそういう気持ちを話し合っ、乗り越えていかないといけないなと思っていました>「(涙をこらえながら)先生にそのように話していただいて、先生もおつらいということが分かりましたし、私が先生とお別れすることが悲しいのだということも先生が分かって下さっていたのは嬉しいです。私は本来、相手の私生活が分かっていないと話せない。だけど先生にはそういうことを知らなくても甘えちゃって、わがままを言い放題で、初めて本気で話せる人ができたと思った。でも今後は、今までの人生は今までのこととして、自分なりに頑張らないといけないと思ったんです」<Aさんの人生はずっと甘えられない人生だったので、毎週お会いするという形になると、甘えたいという気持ちが起こってくるのも当然だと思っていました>「先生は本音でつきあったり、甘えたり出来る人だと思っていました。先生には甘えることができたのは本当によかった。(終了時間となり、立ち上がって)どうか健康に留意されて、益々ご活躍されますよう、陰ながらお祈り申し上げます」<私もいろいろと学ばせていただきました。ありがとうございました>

(2)事例の考察

Aさんの両親は、差別されるという逆境に耐えながら勉強をして能力を身につけ、差別する者を見返すことを信念として生きてきたため、自分たちに対するのと同様にAさんに対しても教育熱心であった。そのため、学校以外にもあらゆる習い事に通わせ、家ではゆっくりとAさんの話を聞くよりも厳しくしつけることを優先するかかわりとなった。そうしたかかわりによって、幼いAさんは子どもらしい依存欲求を抑圧せざるを得なくなり、両親の期待にそつなく応える子どもとして育った。また、母親から「人には何かのことで腹が立っても絶対に嫌な顔をしては駄目」というのを繰り返し言われていたことによって、自己主張したいという欲求も抑圧することを余儀なくされていたと思われる。

結婚の年頃となったAさんは、幼少期からゆっくりとした家族の時間を過ごせず、依存欲求が満たされていなかったため、その充足を夫婦関係の中に求め、家族の時間がしっかり得られると期待して公務員の相手を選んだ。しかし、実際は夫と姑に「嫁いびり」をされる「地獄のような日々」を送ることになった。そして、2年後には子宝に恵まれるものの、その数年後に胃潰瘍となり、静養中には離婚を考えていた。しかし、それは愛息の一言で自ら撤回を決断し、「この息子のために生きる。人生をこの子に賭ける」と考え、夫や姑のもとに戻った。そして、Aさんは再び「地獄のような生活」を送ることになったが、そうした日々の中では、「すべて自分が正しいと思うから相手に腹が立つ。相手があなたを批判するのは、そう言わせるあなたに何か悪いところがあるからなのだ」という、幼少期から父親に言われていた箴言が思い出され、自責的に耐

え続けていた。このことから、Aさんの内的世界には厳しく教育する内的両親像が棲みついており、特に内的父親像が上記の箴言によって彼女を論し続けることで、彼女自身のパーソナリティーにマゾヒスティックで自責的な側面が徐々に形成されていったと思われる。

娘を出産後は子育てを「唯一の生き甲斐」と感じて生きるようになり、Aさんは子どもたちを自分の「手の中」に入れて、自分の「思い描いた通り」に教育することに活路を見いだした。子どもの頃から差別を受け、結婚後も夫と姑に虐げられていたAさんにとって、子育ては自己効力感を感じ、自尊心を保つための大切な営みであったと思われる。しかし、Aさんが息子や娘にしていた、自分の苦勞した生き様を語り、「世間に出ても恥ずかしくないように厳しく教育する」といったやり方は、子どもたちのニーズを尊重するよりも、むしろAさんのニーズを優先したものであり、子どもたちはAさんのニーズを満たす存在となっていたと思われる。またAさんのそうした教育は孫にも及んだが、そのことは孫娘の不登園をきっかけに嫁から非難され、それまで比較的従順だった息子からもAさんへの不満が語られることとなった。初回来談時の「10数年前から身体症状が取れない」という主訴にみられる「身体症状」はこの時期から始まったものであった。こうしたAさんの身体症状は、息子からの衝撃的な不満の訴えによって、これまでの子育てや生き方の再考を迫られたことに由来するものと思われる。

私との心理療法の中では、私がAさんの差別された経験や夫や姑に反発しないで生活してきた経験にひたすら傾聴し続けていると、Aさんはセッションを重ねるごとに私への陽性感情を語るようになっていった。そして、昔通っていた習い事から得た知識や家事での工夫を毎回のようにより力説することから、私はそれらの講義を受けており、「息子のようになっつけられているのではないか」と感じるようになった。さらに、私にプライベートのことに関する質問に答えるよう要求することも多くなり、これらのことから私は、Aさんに自分自身を支配され、身動きが取れなくなるような感覚を味わうようになっていった。これはまさに厳しく教育されていたAさんの味わっていたものであり、ひいては息子や孫たちがAさんから味わっていたものであったろうと思われる。「厳しく教育される者」であったAさんは、自己の幼児的で依存的な部分を息子や孫たちや私に投影し、「厳しく教育する者」となってそれらの人たちをしつけることによって、自己のそうした部分をしつけようとしていたものと考えられる。また、Aさんは多くの家庭の子どもが小学校までしか通えなかった時代に女学校にまで通い、またそれ以外にもたくさんの習い事をしてきたことを実に詳しく誇らしげに語っていた。このことは、「差別される者」であっても「差別する者」よりも高い教育を受け、実質は後者よりも優位な立場にいると感じることで、無力感を防衛していたと思われる。講演会では自分が差別される立場にいることを自ら表明し、「『あなたたち、差別をするなら、してみなさい!』という思いだった」とのことであるが、私のことが「差別する者」と映っていた可能性もあり、こうした気持ちは面接場面において私に対しても感じていたのではないかと推測される。

Aさんは面接場面で、他者への不満や怒りをありのまま表出して私に傾聴され共感される体験を重ねたが、こうした体験は、「甘えたことがない」Aさんにとって、体験し損ねた依存欲求を体験するための絶好の機会となったものと思われる。Aさんには甘えを許されなかった自分や差別された自分のつらさを十分に悲しめるようになる必要があると考え、私はそれらのつらさの受け皿となり、共感的に応答するように努めた。そして、Aさんが自分自身のつらかった過去につ

いて、私を相手に吐露し続けるうちに、面接をキャンセルするという形で私への不満を示したり、やがてははっきりと不満を訴えたりするようになった。このことは、私に不満を伝えても決して私に報復されることがないといった安全感を感じたためであると思われる。そして、「私が放っておけないのが良くないのかもしれない」「『ちゃんとやらせたい』という私自身の気持ちを納得させるためにしている」「家事をしない嫁を変えるのではなく、自分を変えるしかないと思う」と述べるなど、自分自身の問題としても内省し始めた。このことは、息子や孫たちや私を支配することで自らの幼児的で依存的な部分を抑え込むのではなく、面接場面でそうした部分を私に抱えられることによって自らの感情として語り、やがては自分自身で抱えられるようになったことで、それらの人たちへの支配を緩めることができたものと思われる。

世代間伝達における心的メカニズム

臨床素材として記述したAさんの臨床事例から、世代間伝達における心的メカニズムとして、投影同一化と役割逆転が考えられる。

(1) 投影同一化と世代間伝達

精神分析学の領域で「投影」という概念が用いられるのは、妄想の病理を説明することがその端緒となった。フロイト,S.(1911)は「シュレーバーの症例」の被害妄想を論じる際に、「『私は彼を憎む』という命題（感情、その内的知覚）が投影の機制によって他の命題—彼は私を憎む（追跡する）、だから私が彼を憎むのは当たり前だ—に変わる」とし、「投影」を自己の耐えられない感情などが自己から排出されて他者の中に投げ込まれることとした。そしてそれによって、耐えられない感情は自己に帰属するものではなく他者に帰属させることと見なした。その後、投影の概念が豊穡なものとなっていききっかけを作ったのが、クライン,M.(1946)である。クライン,M.は、以下のように述べている。（〔 〕は筆者が補足したものである。）

「〔乳児の〕攻撃は肛門的および尿道的衝動から生じ、危険物（排泄物）を自己の中から追い出し、母親の中へと追いやろうとするのである。憎悪をもって追放されたこれらの有害な排泄物とともに、自我の分裂排除〔split-off〕された部分もまた、母親の上に投影される。というよりはむしろ、母親の中に投影されるというべきであろう。これらの排泄物と自己の悪い部分は、対象を傷つけるばかりか、対象を支配し、対象を手に入れることにもなる。母親が自己の悪い部分を含み持つ〔contain〕限り、母親は分離した個体として感じられず、むしろ悪い自己そのものであると感じられる。」

クライン,M.は、こうした現象を「投影同一化(projective identification)」と呼んだ。つまり、乳児の自己の「悪い部分」が母親（対象）の中に排泄（投影）されることで、母親は自分自身がコントロールされ、「悪い母親」に「なってしまった」「させられた」と感じられるのである。フロイト,S.の娘のフロイト,A.(1936)が提唱した「攻撃者との同一化(identification with aggressor)」という概念は、攻撃された者が攻撃した者の特性を自分のものとして取り込んで同一化することによって、以前に攻撃された無力感や傷つきを他者に対して攻撃することによって緩和しようとする防衛機制である。この概念は、投影同一化という概念を用いるなら、攻撃された者が攻撃した者からもたらされた無力感や傷つきを分裂排除し、それらを他者の中に投影することであ

ると言い換えられるであろう。Aさんの事例でも、Aさんが両親から甘えを許されずに「厳しく教育された自己」を分裂排除し、息子や孫や私の中に投影することで、三者を「厳しく教育されるべき対象」と見なして教育するといった形でコントロールしていたものと考えられる。私が「息子のようにつけられているのではないか」と感じ、Aさんに自分自身を支配され、身動きが取れなくなるような感覚を味わうようになっていった背景には、このような心的メカニズムが働いていたものと思われる。こうした投影同一化は、Aさんがわれわれとの間で行っていたように、Aさんの両親がAさんとの間で行っていたことでもあり、世代を超えて伝達されたものであることがうかがわれる。

さて、クラインの投影同一化の概念は、上述したように、自己の「悪い部分」を分裂排除して対象の中に投影し、対象をコントロールするといったことを内包していた。それに対し、ピオン、W.R.(1959,1962)は投影同一化の概念をさらに発展させ、「悪い部分」が投影されることによって、対象との間で無意識的なコミュニケーションが行われるとした。たとえば、乳児が自分は死にかかっているといった不快な感覚を抱く場合、乳児は泣き叫ぶことを通して母親にそれを投影するが、健全な母親であれば、乳児のそうした不快な感覚を自分が「受け皿(container)」となって抱え持ち(contain)、それを緩和して乳児に返すことによって、乳児はそうした感覚を心の中に抱え持つことができるようになるとした。Aさんの事例でも、Aさんは地域社会から差別されたり、夫や姑から「嫁いびり」をされたりしたつらい感情体験を投影同一化によって繰り返し私に伝え、私がそれを抱え持って共感的に理解し、理解したことを伝え返すことで、Aさんは「今までの人生は今までのこととして」、人生上のつらさを心の中に抱え持つことができるようになっていったと思われる。

(2) 役割逆転と世代間伝達

役割逆転 (role reversal) とは、親が自らの情緒的欲求の満足を子どもから得ようとする事 (Morris & Gould, 1963)であり、子どもが自らの子どもとしての欲求を犠牲にしても、親の身体的および情緒的欲求を満たそうとする、つまり親の「世話役(caretaker)」として行動すること (Garbarino, Guttman & Seeley, 1986)である。フロイト、S.の高弟であったフェレンツィ、S. (1933)も、外傷体験を持った母親が子どもを自らに縛り付けることを「苦しみのテロリズム(terrorism of suffering)」とよび、「子どもは、どんなものであれ家族内の波乱はすべて調停したいという強迫を持っています。ほかの皆の重荷をそのか弱い両肩に担おうというわけです。(中略) 自らの苦しみを訴える母親は、子どもを一生の世話役にし、結局のところ母親代わりにしてしまうことがあります」として、母子の役割逆転について論じている。ポウルヴィ、J.も役割逆転について論じていることは、上述した通りである。Aさんの事例でも、Aさんが息子や娘にしていた、自分の苦勞した生き様を語り、「世間に出ても恥ずかしくないように厳しく教育する」といったやり方は、別の角度から見れば、自分の世話役としての子どもに「苦勞した生き様」という名の愚痴を聞かせ、自分の「生き甲斐」として「恥ずかしくない」ように教育をさせてもらうことであったとも考えられる。つまり、子どものニーズを尊重するよりも、むしろAさんのニーズを優先していたのであり、子どもたちはAさんのニーズを満たす存在となっていたのである。こうしたAさんと息子や孫たちとの間の役割逆転は、Aさんの両親とAさんとの間で起こっていたことが世代間伝達されたものとして考えられるであろう。そして、こうした役割逆転は、Aさ

んが私との出会いによって、心理療法という抱えの環境としての心理的空間が与えられ、「『ちゃんとやらせたい』という私自身の気持ちを納得させるためにしている」という洞察を得て、やがて「息子に家のことは任せられる」と感じ、「孫たちの世話や家事の全てのことから引退することにつながったものと思われる。

引用文献

- バルマリ,M. 岩崎 浩訳 1988 彫像の男—フロイトと父の隠された過ち— 哲学書房。
(Balmory,M. 1979 *L'homme aux Statues*. Grasset et Fasquelle : Paris.)
- ビオン,W.R. 松木邦裕監訳1993 連結することへの攻撃 スピリウス,E.B.編 メラニー・クライン・トゥデイ① 岩崎学術出版社 Pp.106-123. (Bion,W.R. 1959 *Attacks on Linking*. In Spillius,E.B.(ed.), *Melanie Klein Today*, 1,1988)
- ビオン,W.R. 松木邦裕監訳 1993 思索についての理論 スピリウス,E.B.編 メラニー・クライン・トゥデイ② 岩崎学術出版社 Pp.34-44. (Bion,W.R. 1962 *A Theory of Thinking*. In Spillius,E.B.(ed.), *Melanie Klein Today*, 1,1988)
- ボウルビィ,J. 黒田実郎訳 母子関係の理論①②③ 岩崎学術出版社。
(Bowlby,J. 1969, 1973, 1980 *Attachment and Loss*. 1, 2, 3. Hogarth Press.)
- クラメル,B. 小此木啓吾・福崎裕子訳 1994 ママと赤ちゃんの心理療法 朝日出版社。
(Cramer,B 1989 *Profession Bebe* Calmann-Levy;Paris.)
- エリクソン,E.H. 仁科弥生訳 1977 幼児期と社会 みすず書房。
(Erikson,E.H. 1950 *Childhood and Society*. W. W. Norton & Company, Inc.)
- エリクソン,E.H. 西平 直訳 1991 フロイト—ユング往復書簡における<大人であること>という主題 「みすず」366, 61-75. みすず書房. (Erikson,E,H. 1980 *Themes of adulthood in the Freud-Jung correspondence*. Smelser,N.J. & Erikson,E.H. (ed.), *Themes of Work and Love in Adulthood*. Harvard University Press.)
- フェレンツィ,S. 2007 大人と子どもの間の言葉の混乱—やさしさの言葉と情熱の言葉 森 茂起・大塚紳一郎・長野真奈訳 精神分析への最後の貢献—フェレンツィ後期著作集— 岩崎学術出版社, pp.139-150. (Ferenczi,S. 1933 *Confusion of Tongues between Adults and the Child*. *Final Contributions to the Problems and Methods of Psychoanalysis*,3, Balint,M.(ed.), Brunner/Mazel : New York. 1955, 156-167.)
- Fraiberg,S. 1980 *Clinical Studies in Infant Mental Health*. Tavistock.
- フロイト,A. 1982 黒丸正四郎・中野良平訳 自我と防衛機制 アンナ・フロイト著作集2 岩崎学術出版社. (Freud,A. 1966 *The Writing of Anna Freud Volume II, The Ego and the Mechanisms of Defense*. International University Press, Inc.)
- フロイト,S. 1983 小此木啓吾訳 自伝的に記述されたパラノイア(妄想性痴呆)の一症例に関する精神分析的考察 フロイト著作集9 人文書院. (Freud,S. 1911 *Psycho-Analytic Notes on an Autobiographical Account of a Case of Paranoia (Dementia Paranoids)*. Standard Edition, 12. Hogarth Press.)

- フロイト,S. 1971 懸田克躬・高橋義孝訳 精神分析入門(続) フロイト著作集1 人文書院.
(Freud,S. 1933 New Introductory Lectures on Psycho-Analysis. Standard Edition, 12, Hogarth Press.)
- 深津千賀子 2001 育児困難の母親にみられる"偉提希"の葛藤 小此木啓吾・北山 修編 阿闍世コンプレックス 創元社 Pp.250-267.
- Garbarino,J., Guttman,E., & Seeley,J. 1986 The Psychologically Battered Child : Strategies for Identification, assessment and intervention. Jossey-Bass.
- 橋本やよい 2000 母親の心理療法 日本評論社.
- クライン,M. 1985 小此木啓吾・岩崎徹也責任編訳 分裂的機制についての覚書 メラニー・クライン著作集4 妄想的・分裂的世界 誠信書房. (Klein,M. 1946 Notes on some schizoid mechanisms. In Klein,M.(1975) The writings of Meranie Klein, 3. Envy and Gratitude and Other Works(1946-1963). Hogarth Press.)
- 古澤平作 1954 罪悪意識の二種-阿闍世コンプレックス 精神分析研究, 1(2) (「小此木啓吾・北山 修編 阿闍世コンプレックス」の中に所収) .
- クリュル,M. 水野節夫・山下公子訳 1987 フロイトとその父 思索社.
(Krüll,M. 1979 Freud und sein vater Beck'sche Verlagsbuchhandlung ; München)
- レボヴィシ,S. 小此木啓吾訳 1991 幻想的な相互作用と世代間伝達 精神分析研究, 34(5), 285-291. (Lebovici,S. 1988 Fantasmatic interaction and intergenerational transmission. Infant mental health journal, 9(1), 10-19.)
- Morris,M.G., & Gould,R.W. 1963 Role Reversal : A Necessary Concept in dealing with the "Battered Child Syndrome". American Journal of Orthopsychiatry, 33, 298-299.
- 西平 直 1993 エリクソンの人間学 東京大学出版会.
- 小此木啓吾 1992 フロイト・S. に関する伝記的研究の動向 精神分析研究, 36(3), 218-228.
- 小此木啓吾 1988 阿闍世コンプレックス-どうとらえるか 精神分析研究, 32(2), 103-116.
- 小此木啓吾 2002 フロイト思想のキーワード 講談社現代新書.
- 鑪 幹一郎 1990 ライフサイクルと家族 小川捷之・鑪 幹一郎・斎藤久美子編 臨床心理学大系第5巻 ライフサイクル 第I章, pp.1-22.
- 田中千穂子 1997 乳幼児心理臨床の世界 山王出版.
- 辻河昌登 2008 世代間伝達に関する精神分析学的考察 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 572-584.
- 鵜飼奈津子 2000 児童虐待の世代間伝達に関する一考察 心理臨床学研究,18(4),402-411.
- 渡辺久子 2000 母子臨床と世代間伝達 金剛出版.

(臨床実践指導学講座 博士後期課程 3 回生)

(受稿2008年9月8日、改稿2008年12月1日、受理2008年12月11日)

Consideration of Intergenerational Transmission from Psychoanalytic Perspectives –Part II

TSUJIKAWA Masato

Mothers who possess difficulties or concerns regarding ambiguous anxieties, caused by the annoyance of raising children, cannot control themselves. It seems that their own unsolved problems lurk in these anxieties. Their problems forced their children to bear the burden of intergenerational transmission, and the children expressed it with their own symptoms and behaviors. The purpose of this paper is to clarify psychic mechanisms in intergenerational transmission from the psychoanalytic perspectives. In this paper, the definition of intergenerational transmission is that a parent's patterns of object relations shaped by engagement with his/her own parents are transmitted through engagement with his/her own children. First, the paper presents a clinical case of an old woman who has been suffering from physical symptoms for ten years. Second, projective identification and role reversal are abstracted as psychic mechanisms of intergenerational transmission. Projective identification is the term based on the next process; ridding of the self of unwanted aspects of the self, depositing of those unwanted parts into another person; and finally, regarding not self aspects as another person's making the other experience such aspects. Role reversal is the term expressing that parents try to get satisfaction of their emotional needs from their children regarding their children as their own caretaker.